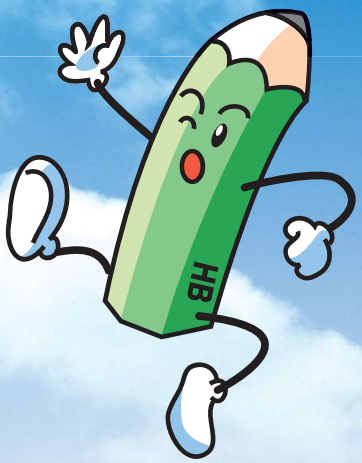
再発見!! 歩いて、聞いて、守ろう!

佐渡を世界遺産に

佐渡金銀山



新潟県・佐渡市

もくじ

1 金と銀の島佐渡

(1) 佐渡金銀山 …… 1
(2) 西三川砂金山 …… 2
(3) 鶴子銀山 …… 4
(4) 新穂銀山 …… 5
(5) 江戸時代の佐渡金銀山 …… 6
(6) 上相川遺跡 …… 8
(7) 佐渡奉行と金銀山 …… 9
(8) 江戸時代に描かれた絵巻 …… 10
(9) 西洋技術のとり入れ …… 11
(10) 官営鉱山から民営へ …… 11
(11) 昭和の佐渡金銀山 …… 13
(12) 相川に残っている近代化遺産（明治～昭和の時代） …… 14

2 島の文化と技術

(1) 島の文化 …… 15
(2) 江戸時代の鉱山技術 …… 16
(3) 暮らし …… 18

3 守り伝えるもの

世界遺産登録をめざして …… 19
付録１　佐渡金銀山年表 …… 20
付録２　世界遺産とは …… 21
付録３　日本の世界遺産 …… 22

はじめに

海に囲まれた佐渡には、昔から全国各地からたくさんの人がやって来て、さまざまな習慣や文化が伝えられてきました。そして、それは佐渡に住む人々によって大切に守り継がれてきました。みなさんのまわりには、100年、200年もたった古いものがたくさん残されています。佐渡金銀山遺跡もそのひとつです。

この冊子によって、佐渡金銀山の歴史や価値をみなさんに再発見していただき、佐渡の歴史や文化を考えるきっかけとしていただけることを願っています。

表紙の写真　上:道遊の割戸　下:「佐渡鉱山全景案内」(昭和7年)

1 金と銀の島佐渡

(1) 佐渡金銀山 ～昔、佐渡では金も銀もとれた～

佐渡は、昔から金や銀などのとれる島として知られていました。なかでも平安時代から砂金をとっていた西三川砂金山、室町～安土桃山時代に島で最大の銀山だった鶴子銀山や新穂銀山、そして日本最大の金銀山といわれる相川金銀山などがおもな鉱山で、これらをまとめて「佐渡金銀山」とよんでいます。

西三川の砂金

元文小判

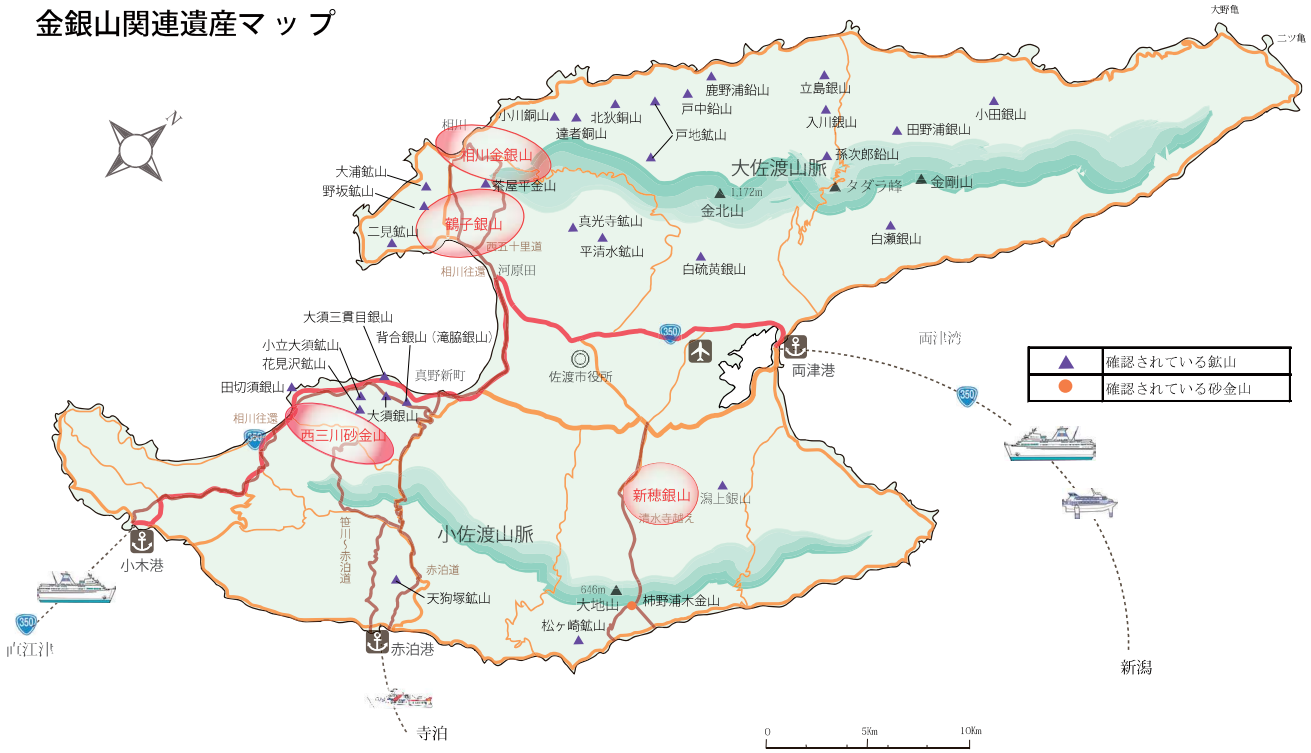
小判の裏に押された印によって佐渡でつくられたことがわかります

1603年、徳川家康は佐渡を幕府が直接治める領地（天領）とし、島の政治や金銀山経営のため相川に佐渡奉行所をおきました。これ以後1989年までのおよそ400年間、佐渡金銀山は日本を代表する鉱山でした。佐渡金銀山では、新しい技術が次々にとり入れられて、大量の金銀を産出し、江戸時代には相川で小判もつくられました。

また、金銀山で働く人々でにぎわった江戸時代の相川は、日本最大の鉱山都市として栄えました。そして、相川に住む人々が食べる米・野菜・魚などの食料や、金銀山で必要な炭・木材などの多くが、佐渡の各地で生産されました。

このように、佐渡の歴史は金銀山と深いつながりをもち、金銀山と人々の生活の歴史は、鉱山の遺跡や田畑・山林・町の姿などに残されており、現在も島のいたるところで見ることができます。

金銀山関連遺産マップ



(2) 西三川砂金山　～水を利用した砂金とり～

今から約1,000年前の平安時代に、佐渡で金がとれたという記録があり、その舞台となったのが真野地区の西三川砂金山といわれています。1589年、佐渡を支配した越後国（現在の新潟県）の戦国大名上杉景勝は、西三川砂金山の再開発を行いました。

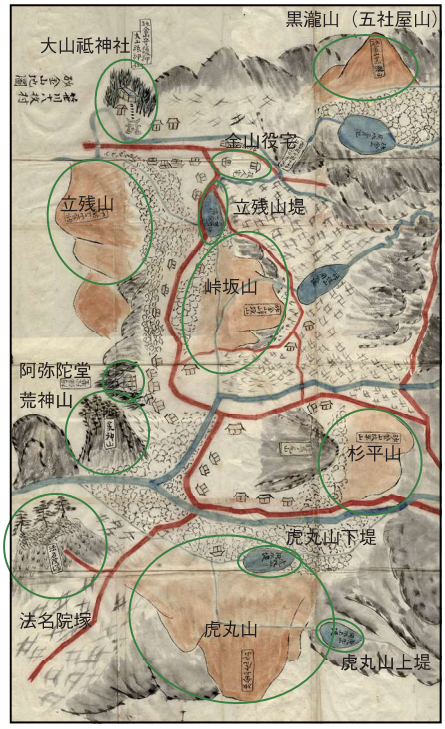
笹川集落と虎丸山
砂金とりで崩され、地肌が見えています

安土桃山～江戸時代にかけて、砂金をとるために、砂金が含まれている山を掘り崩し、余分な石や土を大量の水で洗い流してから、残った砂金をゆり板で選びとる砂金流しという方法がとられました。これにはたくさんの水が必要だったため、西三川砂金山の周辺にはいくつもの水路が作られ、中には9km以上の長いものもあります。江戸時代には佐渡奉行所から役人が派遣され、砂金とりが続けられましたが、しだいにその量は減少し、1872（明

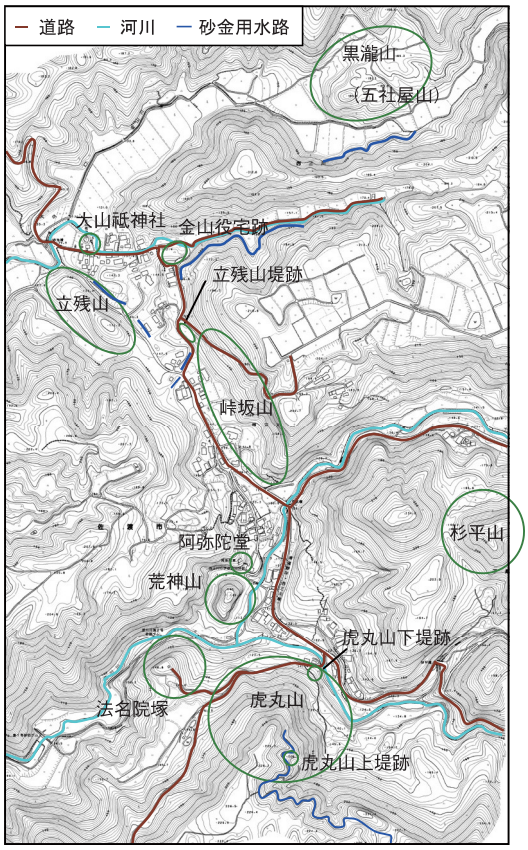
「西三川砂金山稼方図」の一部　砂金とりのようすが描かれています

砂金とり　ゆり板を使って砂金をとっています

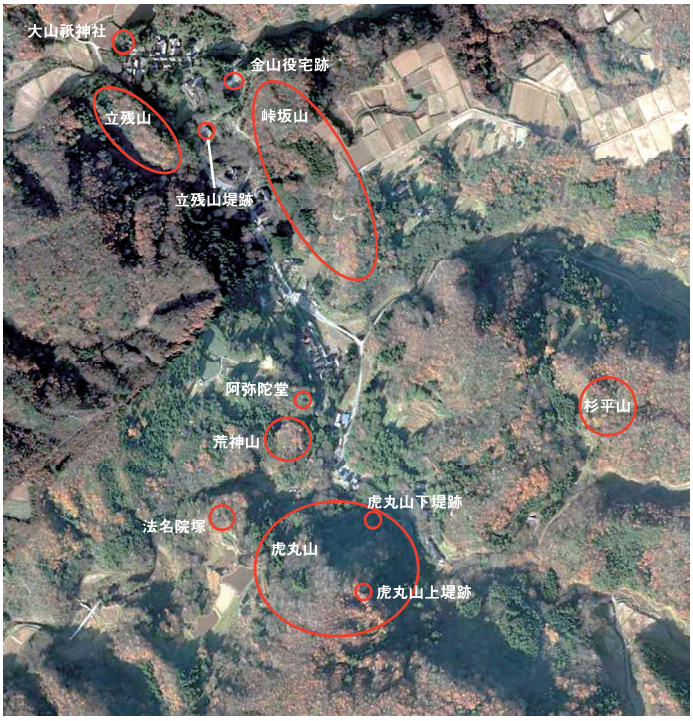
治５）年に閉山となりました。そして、砂金とりを行っていた人々は、生活の手段を農業に変えて、現在もこの地に住み続けています。また、砂金をとった山や水路などの跡もよく残されており、江戸時代の絵図とほとんど変わらない風景を今も見ることができます。この古い地図に描かれている道や水路が今も残っています



「笹川十八枚村砂金山地図」



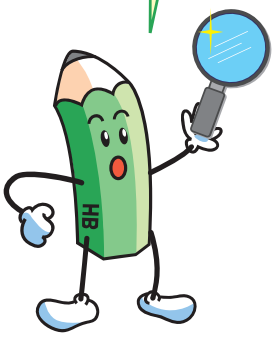
現在の地図



笹川集落航空写真

調べてみよう

昔の地図と比べて見よう。



佐渡金銀山年表

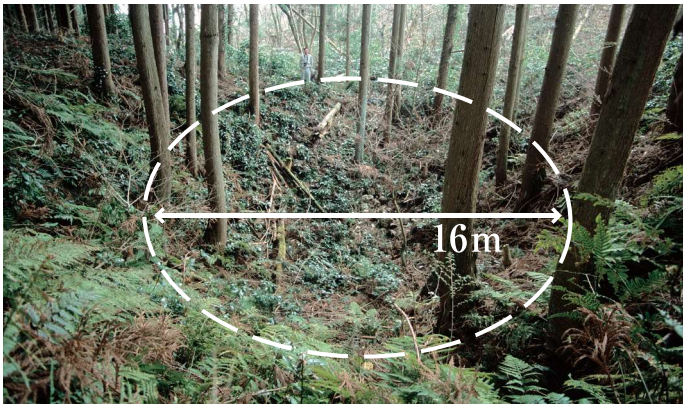
- 平安時代
  - 『今昔物語集』に「佐渡ノ国ニコソ金ノ花栄タル所…」の記述あり
- 鎌倉時代
- 室町時代
  - 世阿弥の『金島書』に「かの海に金の島のあるなるを、その名と問へば佐渡と云也」の記述あり
- 安土桃山
  - 相川金銀山発見
  - 佐渡が天領となる
- 江戸時代
  - 佐渡金銀山が政府直営となる（1869）
- 明治
  - 三菱へ払い下げ（1896）
- 大正
- 昭和
  - 北沢浮遊選鉱場完成（1940）
- 平成
  - 佐渡鉱山休山（1989）

西三川砂金山

1872

(3) 鶴子銀山　～沢根にあった露頭掘りの銀の山～

1542年、越後国（現在の新潟県）の商人であった外山茂右衛門によって鶴子銀山が発見されました。茂右衛門は、「百枚平」とよばれる場所で銀を掘り、地元の領主であった沢根本間氏に１か月に銀100枚を税として納めたと伝えられています。この百枚平周辺では現在でも、「露頭掘り」とよばれる銀をとった跡が数多く残されています。

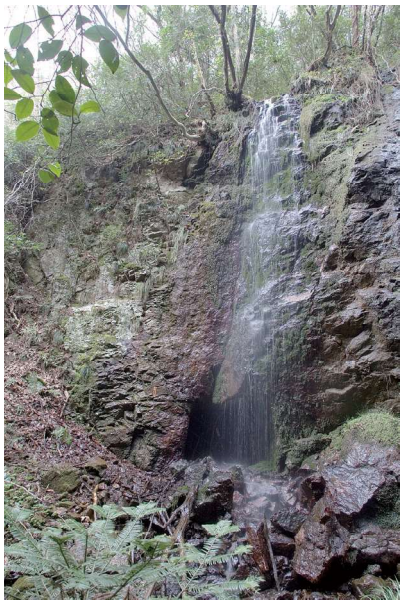


鶴子銀山最大の露頭掘り跡
直径 16m の大きさがあります（写真上部に人）

1589 年、越後国の大名であった上杉景勝は、佐渡を攻めて自分の領地にすると、鶴子銀山や西三川砂金山を支配しました。佐渡で産出した金銀は、上杉氏から豊臣秀吉のもとへも送られました。

1592 年、石見国（現在の島根県）から来た山師によって、「坑道掘り」とよばれる掘り方が佐渡に初めてとり入れられると、銀がたくさんとれるようになりました。鶴子には銀を求めて島外から多くの人や物が集まり、「鶴子千軒」といわれるほど繁栄しました。このような動きは、島内の鉱山開発に影響をあたえ、相川で大規模な金銀鉱脈が発見されるきっかけとなりました。

相川金銀山の発見によって、佐渡の金銀山の中心はしだいに相川へと移り、鶴子にあった代官所や町並みも相川へ移転していきました。その後、鶴子銀山はしだいに銀がとれなくなり、1946（昭和 21）年に閉山となりました。



大滝間歩跡
滝つぼに坑道の入口があります

用語解説

★**露頭掘り**：露天掘りともよばれ、地表に出ている金銀鉱脈を掘るための技術です。戦国時代から江戸時代の初めにかけてさかんに使われた技術で、佐渡でもっとも大きなものが相川金銀山の「道遊の割戸」です。

★**山師**：鉱山の経営者のことを「山師」とよびます。江戸時代の初めには 40 人以上の山師が佐渡にいたといわれています。山師の中には、金銀山の開発によって大きな富を得た人々もおり、その財力を使って寺や五輪塔とよばれる大きな石の供養塔を建てた人もいました。

相川金銀山　宗太夫坑の入り口

用語解説

鉱石　金銀鉱脈が黒く帯状にあらわれています

★**坑道掘り**:坑道（トンネル）を掘って地中の金銀鉱脈を探す技術です。

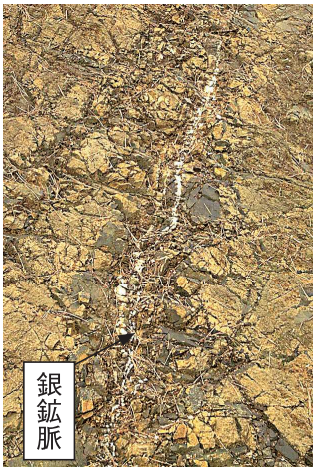
★**金銀鉱脈**:佐渡の鉱脈は、火山活動でできた地層や岩盤の割れ目に金銀を含んだ熱水が固まってできたものです。このうち、最大の鉱脈が相川にあったので、金銀山の中心が相川へと移りました。

(4) 新穂銀山　～新穂にあった銀の山～

新穂銀山は、別名「滝沢銀山」ともよばれる鉱山で、江戸時代の記録や絵図が残されていますが、発見された年代がはっきりしない古い鉱山のひとつです。

百枚間歩跡

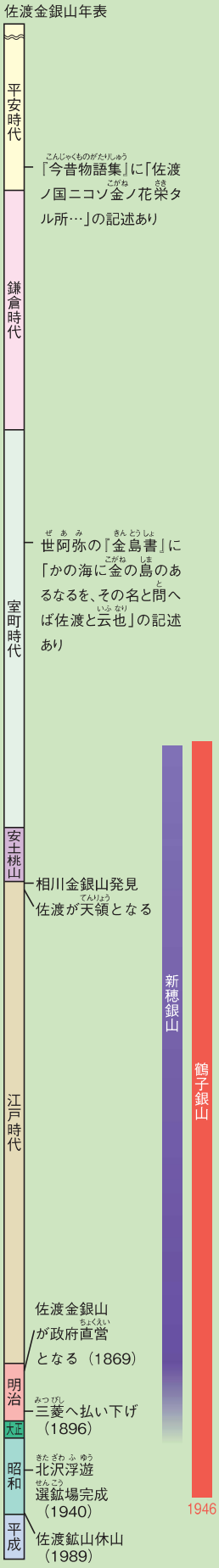
しかし、「百枚間歩」という名前の坑道が存在することから、1542年に発見された鶴子銀山とほぼ同じころに銀が掘られるようになったと考えられています。



新穂銀山にのこる鉱脈

安土桃山時代末から江戸時代の初めにかけて、「滝沢千軒」とよばれるにぎわいをみせた銀山は、その後、何度も開発が行われましたが、かつてのにぎわいをとり戻すことはできませんでした。

新穂銀山の鉱脈は、ほかの鉱山と違って、赤土（粘土）層の中にあります。地盤がやわらかいので坑道掘りには危険でしたが、地表に見える鉱石を効率よくとることができ、小規模な開発に向いてい



る鉱山でした。

現在でも、露頭掘り跡・間歩跡などの銀を採掘した跡や、山師の名前にちなんだ「大和屋敷」、鉱山大工が住んだ「大工沢」など銀山に関係する地名が残っています。

用語解説

★大工：金銀山では、鉱石を掘る作業をした人のことを「大工」とよび、家などを建てる人のことを「番匠」または「家大工」とよんで区別しました。

(5) 江戸時代の佐渡金銀山 ～金銀山と人々の暮らし～

1603年に徳川家康が江戸に幕府を開いてから、1868年の明治維新までの約260年間を江戸時代といいます。この時代の佐渡金銀山のようすについてみてみましょう。

「佐渡の国金堀乃巻」の一部

この時代に最も栄えた鉱山は、相川金銀山です。相川金銀山は、鶴子銀山の山師たちが新しい鉱脈を求めて相川の山に分け入って発見したといわれています。相川金銀山は、江戸時代を通じて金はおよそ40トン、銀はおよそ1,800トンとれ、日本最大の金銀山でした。

「相川町々 并 銀山岡絵図」の一部
今も残っている町名が書かれています

相川でたくさん金銀がとれるようになると、島の外から多くの人々がやって来たため、海辺に十数軒の家しかなかった相川の人口は、一時期4～5万人にまで増えたといわれています。

最初、鉱山に近い上相川に人々が集まって町ができましたが、やがて、海に面した台地の先端につくられた佐渡奉行所を中心に、京町や米屋町・味噌屋町などが計画的につくられました。

人口が急激に増えたため、米や衣類・木材など人々の生活に必要なものが島の外から運ばれました。一方、佐渡の村々でも鉱山向けの品物の生産がさかんになりました。また、坑道を掘るための技術や測量技術な

どを利用して、島内各地で新田開発が進みました。

村の生活は豊かになり、各地で能や人形芝居などが行われるようになりました。また、鉱山で働く人々の中から「やわらぎ」という芸能も生まれました。

新田開発によって海岸段丘上につくられた田んぼ

やわらぎ

相川金銀山で掘られた金は、西三川の砂金とともに相川で小判に加工され、銀とともに奉行所の役人に守られて小木港から江戸へと運ばれていきました。幕府はこれらの金銀を資金として、政治を行ったり、外国と貿易をするために利用しました。

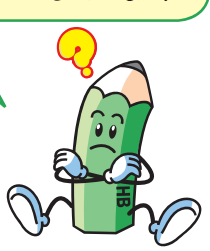
小木港

用語解説

★**やわらぎ**：かたい鉱石が「やわらかく」（掘りやすく）なることと、山の神様が心を「やわらげる」ことを願って、新しい鉱脈が見つかったときや新年のお祝いに行われた芸能です。

調べてみよう

相川にはどんな町名が残っているかな？



佐渡金銀山年表

- 平安時代
- 鎌倉時代
- 室町時代
- 安土桃山
- 江戸時代
- 明治
- 大正
- 昭和
- 平成

『今昔物語集』に「佐渡ノ国ニコソ金ノ花栄タル所…」の記述あり

世阿弥の『金島書』に「かの海に金の島のあるなるを、その名と問へば佐渡と云也」の記述あり

相川金銀山発見
佐渡が天領となる

佐渡金銀山が政府直営となる（1869）

三菱へ払い下げ（1896）

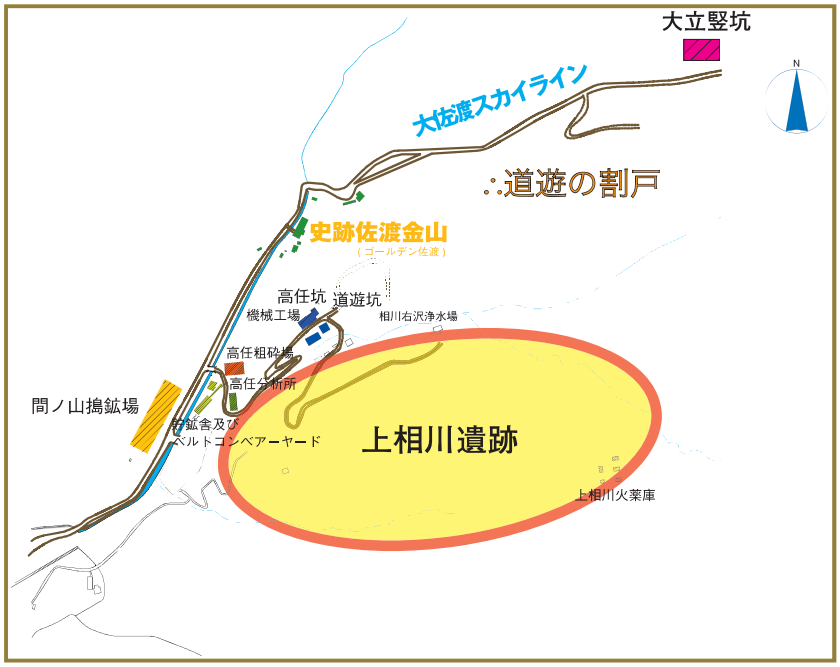
北沢浮遊選鉱場完成（1940）

佐渡鉱山休山（1989）

相川金銀山

1989

(6) 上相川遺跡 ～上相川にあった鉱山の町～



上相川遺跡　位置図

江戸時代の初めに相川金銀山の発見によって誕生した上相川は、相川金銀山で働く人々が集まってできた鉱山町です。このため、働く場所に近く、傾斜の少ない金銀山の南側に町がつくられました。そこでは、山の斜面を削り、土を盛って平らな地面をつくり、たくさんの家が並んでいて、そのにぎわいぶりは「上相川千軒」といわれました。

1652年の記録では、22の町と513軒の家があったとされ、このほかに山の神様を祀った神社や寺などもありました。

上相川の町名には、現在の「相川」という地名のもとになった町や、鉱山に関係する鍛冶職人たちが集まってできた町、床屋の集まっていた町、山師の名前がついた町、飲食店があった町などが見られ、職業ごとに町並みがつくられていったことが想像できます。

斜面を平らにして町がつくられていた跡

金銀山の繁栄とともに発展した上相川は、金銀があまりとれなくなったため人口が急激に減り、1826年の記録では、家の数34軒、町の人口は200～300人ほどになっています。やがて、明治時代に入ると人が住まなくなり、神社や寺も移転して町は姿を消していきました。

上相川遺跡にのこる石垣

用語解説

★床屋：鉱石から余分なものをとり除き、金銀分だけをとり出すための作業（製錬作業）を行った場所を「床屋」とよびました。

(7) 佐渡奉行と金銀山　～金銀山を発展させた佐渡奉行～

復原された佐渡奉行所

1603年に徳川家康は、現在の島根県にある石見銀山を治めていた大久保長安を佐渡代官（のちの佐渡奉行）に任命しました。長安は多くの部下を連れて来島し、石見銀山の技術や経営方法を佐渡金銀山にとり入れました。また、相川に奉行所を建て、計画的な町づくりを行い、鉱山への道路や港を整備しました。こうして、金銀の産出量はそれまでで一番多くなり、相川は大変なにぎわいをみせました。

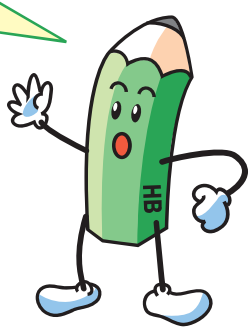
南沢疎水道

17世紀の後半になると、鉱石を掘る場所はしだいに深くなり、わき出てくる水に悩まされるようになりました。この時に佐渡奉行をつとめた荻原重秀は、坑道の中にたまった水をトンネルを掘って海に流す計画を立てました。5年近くかけて地中の岩盤を手で掘って完成させたのが、長さ約1kmの南沢疎水道です。この疎水道ができたことにより、金銀の生産は再び増加しました。

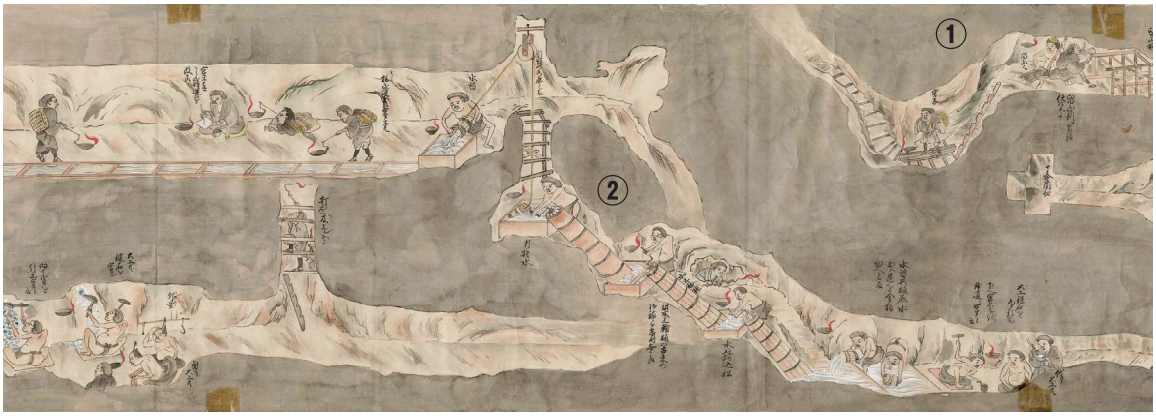
また、18世紀半ばに佐渡奉行をつとめた石谷清昌は、町のあちこちに分かれて仕事をしていた製錬業者を奉行所に集めて「寄勝場」をつくり、作業の効率をよくしました。こうした奉行たちの努力もあって、佐渡金銀山は江戸時代を通じて金銀の生産を続けることができました。

大久保長安像

水をくみ上げるため、水上輪も使われたんだよ。10ページの絵巻や18ページの写真を見てね。

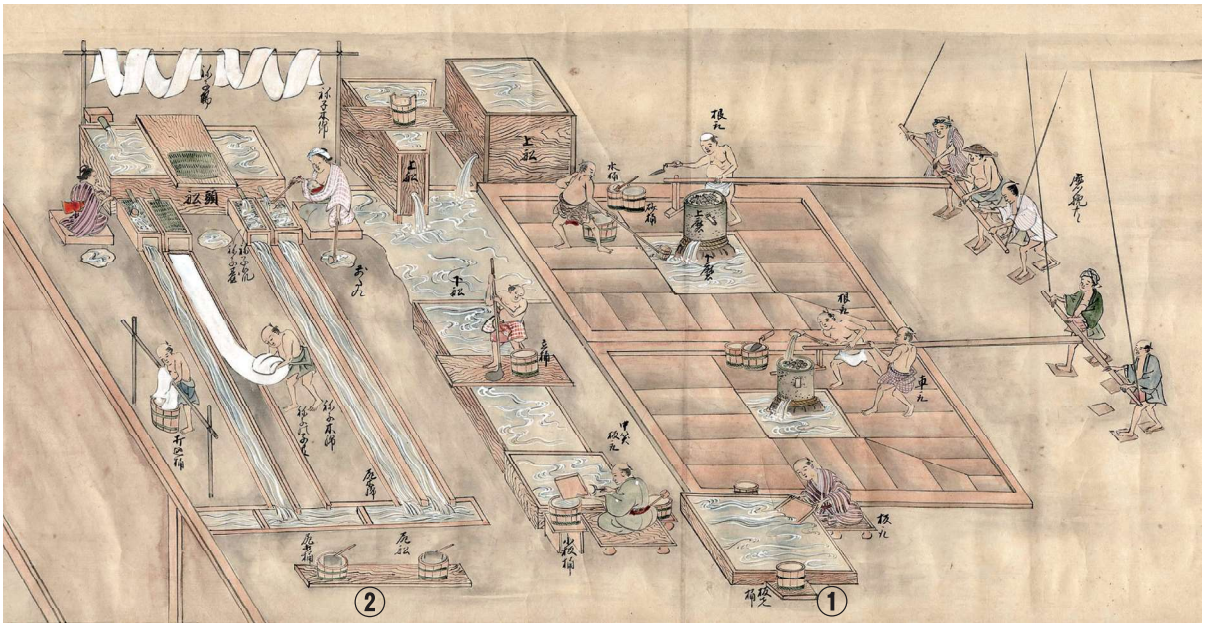


(8) 江戸時代に描かれた絵巻　～「佐渡の国金堀乃巻」より～



坑道内の様子

①約 20kgの鉱石を地上まで運びます。
②水 上 輪を何台も使って水を汲み上げています。



鉱石から金銀分をとり出す作業

①石うすで細かくした鉱石を水に入れて金銀分だけをとり出しています。
②「ねこ場」では、木綿の布に金銀分を付着させて回収しています。

小判の製造

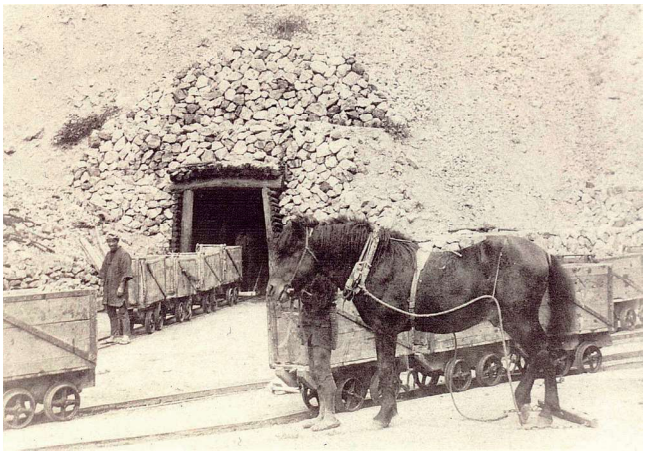
形を整えた小判は、色付薬を付けて火の上でもちを焼くように焼いたあと水で洗い、塩でみがいて完成品になります。

(9) 西洋技術のとり入れ　～新技術で生まれ変わった佐渡金銀山～

明治時代になると、政府は外国人の技術者を佐渡に送り、積極的に西洋の技術をとり入れました。

イギリス人のガワーは火薬によって鉱石を爆破する方法を指導したり、運搬に便利なトロッコをとり入れました。同じくイギリス人のスコットは西洋の機械類の運転などを指導しました。また、アメリカ人のジェニンは水銀を使って金銀を製錬する方法をとり入れて金銀生産の効率をあげ、ドイツ人のレーは金属鉱山では日本最初となる垂直な坑道（大立竪坑）を掘って大量の鉱石を機械で運び上げることに成功しました。

外国人技師
ジェームス・スコット
11年間佐渡鉱山につとめました



トロッコ（鉱車）
明治時代のはじめには馬で引きました

さらに、機械を動かすため蒸気機関が用いられるようになると、燃料として大量の石炭が必要になりました。そのため、新潟県新発田市の赤谷炭鉱や山形県鶴岡市の油戸炭鉱が開発されました。

このように、佐渡金銀山は西洋の技術をとり入れた鉱山に姿を変え、その名も「佐渡鉱山」とよばれるようになりました。

(10) 官営鉱山から民営へ　～技術革新が進んだ佐渡鉱山～

明治時代の初め、外国人の指導で近代化の道を歩みはじめた佐渡鉱山は、その後、外国で技術を学んだ日本人たちに引き継がれ、さらに発展していきました。

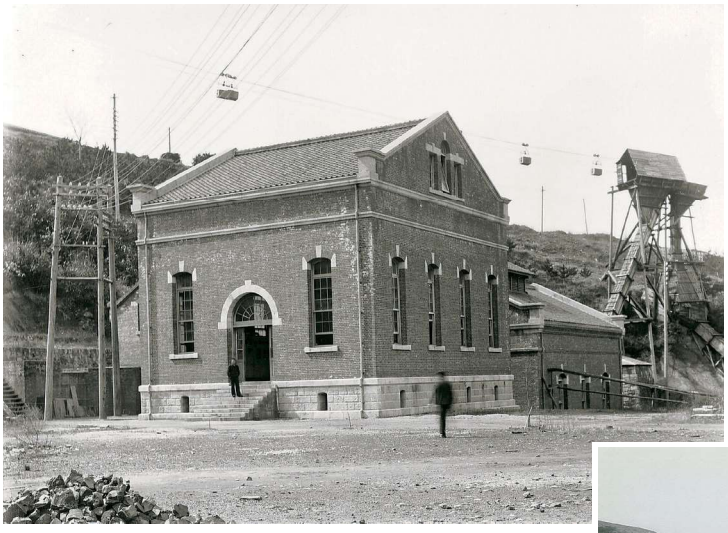
その代表的な人物が、幕末から各地の鉱山開発にとり組み、1885(明治18)年に佐渡にやって来た大島高任です。大島は新しく高任竪坑を掘ったり、大間港を建設しました。

1887年には、ドイツの鉱山学校留学から帰国した渡辺渡が迎えられました。渡辺は最新の削岩機やポンプをとり入れたり、鉱石や土砂の運搬に日本で初めてロープウェーを使いました。

大島高任
岩手県出身の鉱山技術者

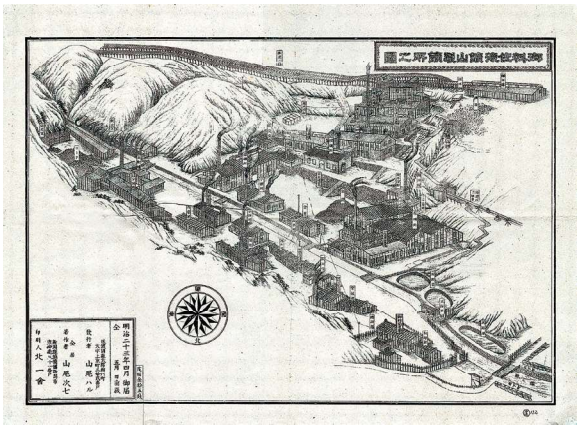
これらの人たちの活躍により、この時期、佐渡鉱山は国内の「模範鉱山」とよばれました。佐渡鉱山学校も開設され、日本各地の鉱山や大学からの実習生、朝鮮国(現在の大韓民国・朝鮮民主主義人民共和国)からの留学生も学び

に来ています。このころ、機械を動かす動力も蒸気から電気へと変わりました。1900（明治33）年には、水車を利用して新潟県で初めての発電が行われました。1908（明治41）年には北沢火力発電所が完成し、さらに1915(大正4)年には、戸地川水力発電所が完成しました。佐渡鉱山は1896(明治29)年には三菱合資会社へ払い下げられ、1989(平成元)年に休山するまで、三菱の経営する鉱山として発展しました。



北沢火力発電所と日本初のロープウェー（架空索道）

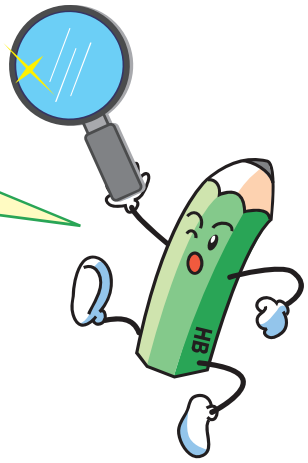
近代的な鉱山に生まれ変わった佐渡鉱山（明治後期）



1890(明治23)年の「御料佐渡鉱山製鉱所之図」

調べてみよう

大島高任と渡辺渡が行ったことについて調べてみよう。



(11) 昭和の佐渡金銀山　～第二次世界大戦から休山まで～

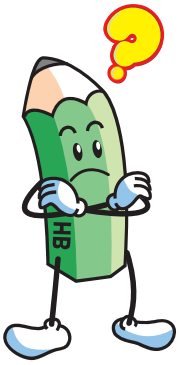
昭和時代に入ると、日本はしだいに中国との対立を深めていきました。1937(昭和12)年に日中戦争が始まると、政府は戦争に必要な物を外国から輸入するため、支払いに必要な金銀を生産するよう各地の鉱山に命じました。

貯鉱舎　1938（昭和13）年に建設され、休山まで使用されました

このとき佐渡鉱山でも多くの施設を建設し、金銀の増産に乗り出しました。大立地区では、大立竪坑に新しく鉄骨の櫓を建て、高任地区にはさまざまな機械を使って鉱石を砕く粗砕場が建てられました。粗砕場とベルトコンベアーで結ばれた貯鉱舎には、2,500トンの鉱石が貯えられたといいます。さらに、北沢地区には直径50mの巨大なシックナーや、東洋一の規模をほこる浮遊選鉱場が建設されました。これらの施設の建設により、多くの金が生産されるようになり、1940年には佐渡金銀山の歴史の中でもっとも多い、年間1,537kgの金を生産しました。

しかし、戦争が激しくなり貿易が難しくなると、金銀よりも戦争に直接必要な銅や亜鉛・鉛などを優先して生産することになりました。

戦争後、佐渡鉱山はふたたび金銀の生産を始めましたが、しだいに質の良い鉱石が少なくなり、1989(平成元)年についに休山となりました。



調べてみよう

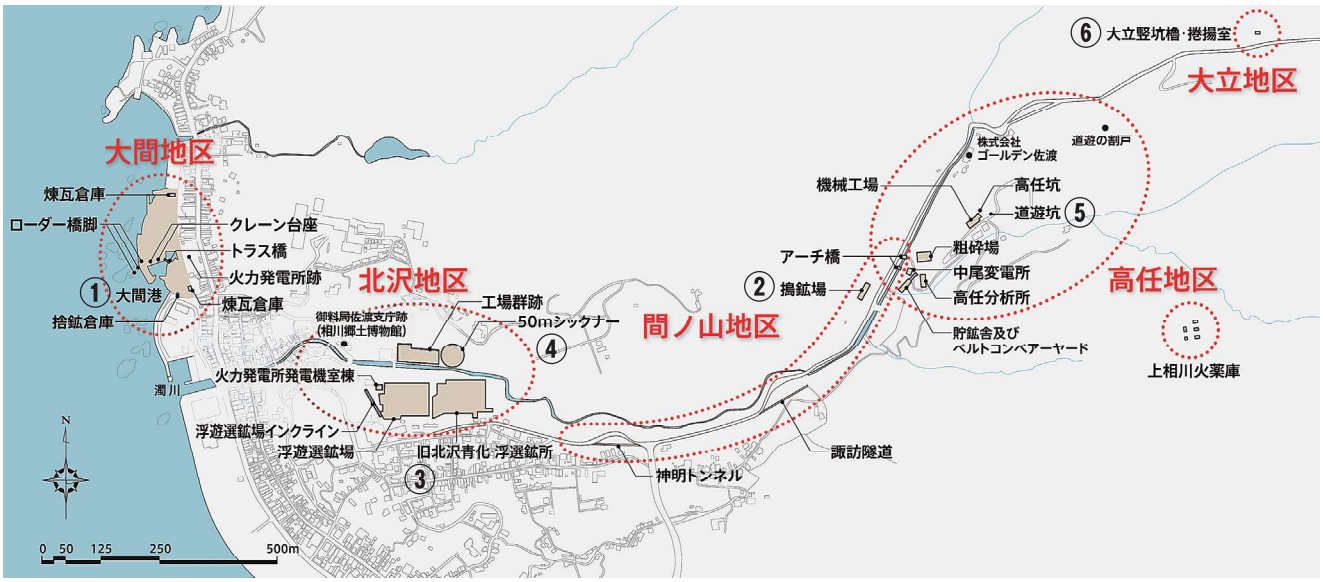
昭和の初めの建物は、このほかにどんなものがあるだろう？

用語解説

シックナー：泥状の鉱石を、水と砂に分離する装置。

浮遊選鉱場：浮遊剤を使用して、金銀を浮かべて分離し、金銀のしぼりかすからさらに金銀を回収した施設。

⑫ 相川に残っている近代化遺産　（明治～昭和の時代）



大間港　鉱石や石炭などの運搬のために建設されました

間ノ山搗鉱場　鉱石の製錬が行われました

北沢浮遊選鉱場（左）と火力発電所（右）　ここは明治･大正･昭和時代の建物が多く残っている場所です

50mシックナー　不足する工場用の水を確保するために利用されました。

道遊坑　鉱車用レールがしかれ、作業員・資材などが運ばれました

大立竪坑

日本の金属鉱山で最も古い西洋式坑道。巻揚室には大正時代のコンプレッサーと昭和時代の巻揚機が置かれています

2 島の文化と技術

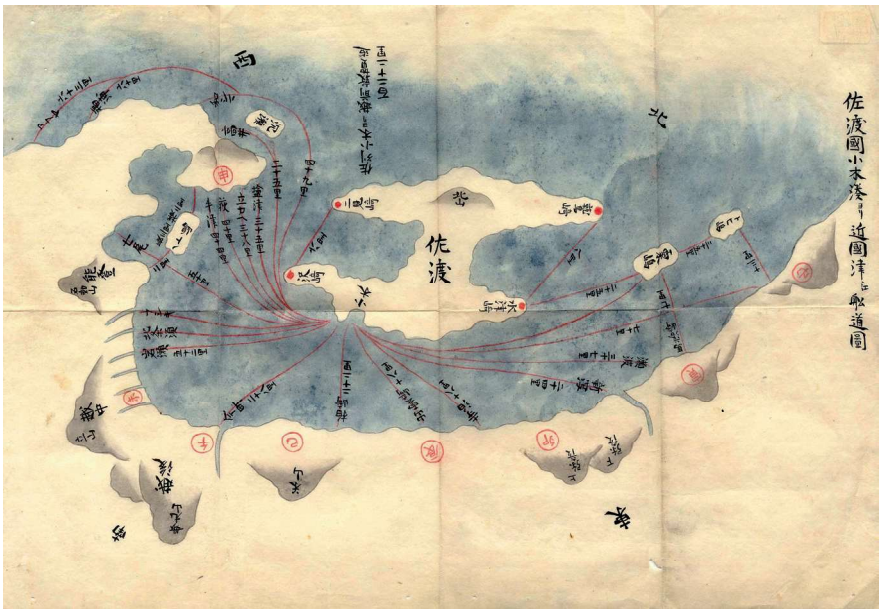
(1) 島の文化

海に囲まれた佐渡は、古くからいろいろな文化を受け入れ、交流をしながら島の文化をはぐくんできました。

相川を中心に佐渡金銀山が栄えると、金銀山をめあてに全国から労働者や商人が集まり、各地の暮らしや芸能が伝わりました。

このように、佐渡にはさまざまなかたちで他国から人が渡り、それぞれの文化、方言や習慣を持ち込み、それを佐渡の人たちは島の伝統として守り伝えてきました。また、人々の楽しみであった人形芝居、神社の祭りによって広まった鬼太鼓や能などは、長い年月をかけて全島に広まり、伝統芸能として守り伝えられました。

また、江戸時代以前から佐渡に伝わり、ほかの場所では見られなくなった行事や芸能を今でも島の各地で見ることができます。



佐渡の小木港と全国各地を結ぶ航路が描かれている絵図

文弥人形　説教節「さんせう太夫」は安寿と厨子王が母をさがして佐渡へやってくる物語となっています

能　佐渡の能舞台は現在も三十数棟残されています

鬼太鼓　江戸時代の相川の年中行事の絵図には、祭りの行列の中に鬼太鼓が描かれています

(2) 江戸時代の鉱山技術

鉱石が金銀になるまでには、①採鉱（鉱石を掘り出す）、②選鉱（鉱石を選び分ける）、③製錬（鉱石から金や銀をとり出す）の３つの作業が行われます。ここでは、これらの作業にかかわる江戸時代の鉱山技術についてみていきましょう。

◆　鉱石を掘り出す技術

地面に現れている鉱石は直接掘りとっていました（露頭掘り）。山の中央が割れたように見える「道遊の割戸」は、露頭掘りの代表的な例です。地表から深く掘り下げることができなくなると、山の横からトンネルを掘って地中の鉱石をめざす坑道掘りという方法がとられるようになりました。また、木材を組み合わせて坑道内の弱い部分を補強する山留技術や、水上輪などを用いた排水技術なども佐渡で発達しました。

絵図をもとに坑道内を再現した模型

◆　鉱石を選び分ける技術

石うすで鉱石をひく（佐渡奉行所 寄勝場）

運び出された鉱石は、勝場と呼ばれる場所へ運び、鉄のハンマーで砕き、さらに石うすで砂よりも細かくすりつぶします。それを水槽の中に入れて軽くゆすり、軽い砂と重い金銀分に分けて回収しました。

次は「ねこ流し」という作業です。すべり台のような形の木のわくに木綿の布を敷き、水槽に残った砂を流し入れます。すると、砂にまじっていた金銀分が木綿に引っかかって残ります。これを何度も繰り返して金銀を回収しました。

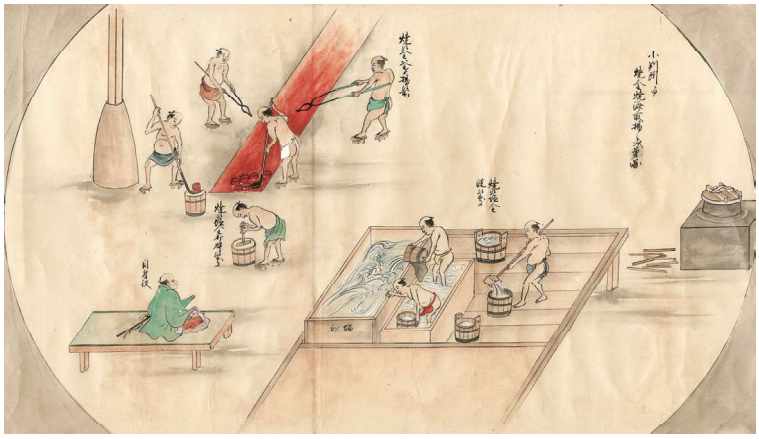
ねこ流し（佐渡奉行所 寄勝場）

◆　鉱石から金や銀をとり出す技術

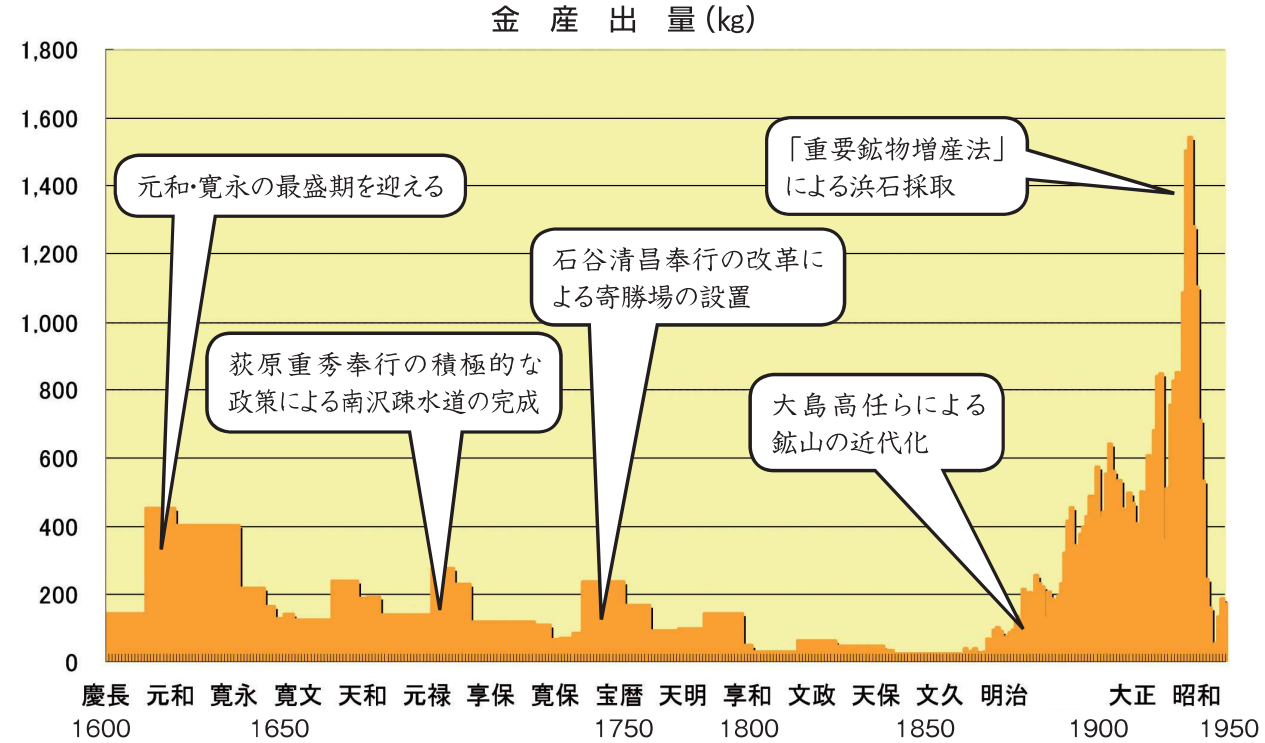
製錬の作業は、床屋とよばれる場所で行いました。まず勝場で回収した金銀と鉛をいっしょに炭火で溶かし、金銀と鉛の合金をつくります。次にそれを灰を敷きつめた鉄鍋で熱すると、鉛が灰にしみ込んで金銀だけが残ります。この作業を灰吹法といいます。これでは金と銀がいっしょになっているままなので、さらに金と銀を分けるために、硫黄や塩を加えて熱し、金と銀を分けました（硫黄分銀法・焼金法）。

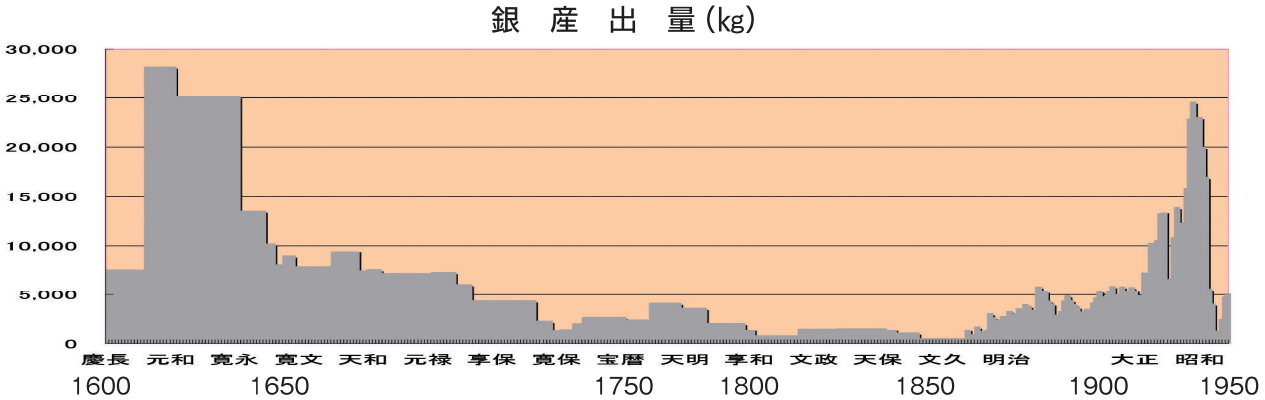
佐渡奉行所跡からは、この製錬に使うために地中に保存していた鉛板が大量に出土しています。

佐渡には、鉱山の様子を描いた絵巻や書物が多く残されており、江戸時代の鉱山技術をわかりやすく見ることができます。



「佐渡の国金堀乃巻」の一部
塩をまぜて金の質を上げる作業をしています





(3) 暮らし

金銀山が栄えるまで、佐渡の人々は農業や漁業を中心に暮らしていました。江戸時代以降、島の農業や漁業、その他の産業は、金銀山の影響によって大きく発展しました。

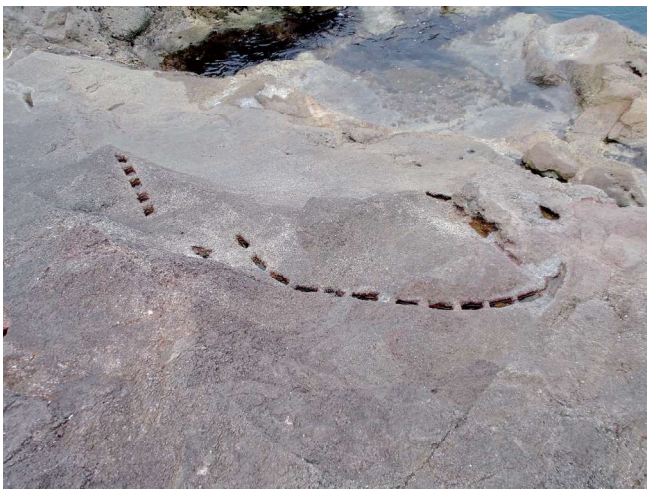
たとえば、新しく水田を開発する時には鉱山で使われた測量技術が役立ち、鉱山の排水に用いた水上輪は田の用水の汲み上げに利用されました。また、鉱山の坑道を補強する土木技術は、道路や橋などの工事にも活用されました。

水上輪
ヨーロッパで開発されたアルキメデスポンプ
中国をへて江戸時代に日本に伝わりました

「佐渡の国金堀乃巻」山留の様子

多くの人が住みついた相川では、食料として大量の魚が必要になり、石見国（現在の島根県）から「はえなわ漁」という新しい漁法を持った人々が佐渡によびよせられました。また、鉱山で使う石うすのほか、人々の暮らしにも、石うす・石製流し台などの生活用品や家の土台となる石垣など、大量の石材が必要でした。このため、製品に適した石材をもとめて、島内各地に石切場が開かれました。

現在も、石切場跡をはじめ、炭や材木用の資源を守るために幕府によって保護されていた山林など、島のあちこちにその足あとが残っており、佐渡金銀山が島の産業や生活にあたえた影響の大きさを知ることができます。



矢穴が残る吹上海岸の石切場跡

3 守り伝えるもの

世界遺産登録をめざして

今、新潟県と佐渡市は佐渡金銀山の世界遺産登録をめざしています。

世界遺産候補になる理由としては、次のことがあげられます。

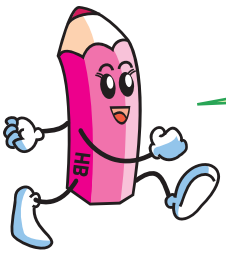
◆400年以上にわたって営まれた金銀山に関係する遺跡や建物・集落などが、今なお佐渡に広く分布していること。

◆さまざまな技術や経営方法が佐渡の鉱山で改良されて発展し、国内やアジアの鉱山へ伝わっていったこと。

◆各時代の鉱山のようすを示す代表的なものであること。

2010年11月22日、佐渡金銀山が日本の世界遺産暫定リストに「金を中心とする佐渡鉱山の遺産群」として記載されました。これは、私たちがあたりまえのように見ていた佐渡の金銀山に関連する遺跡や建造物、景観などが、世界の宝ものとして認められたということです。佐渡に住んでいる私たちには、これらの遺跡を人類共通の「宝もの」として保護し、未来へ引き継いでいくための大きな役目があります。

なにげない小道や石垣のある古い町並みを歩き、昔の人たちの生活や文化について話を聞くことから始めましょう。小さな「宝もの」をみんなでひとつひとつ守り伝えることが、佐渡金銀山の世界遺産登録への確かな歩みとなるのです。

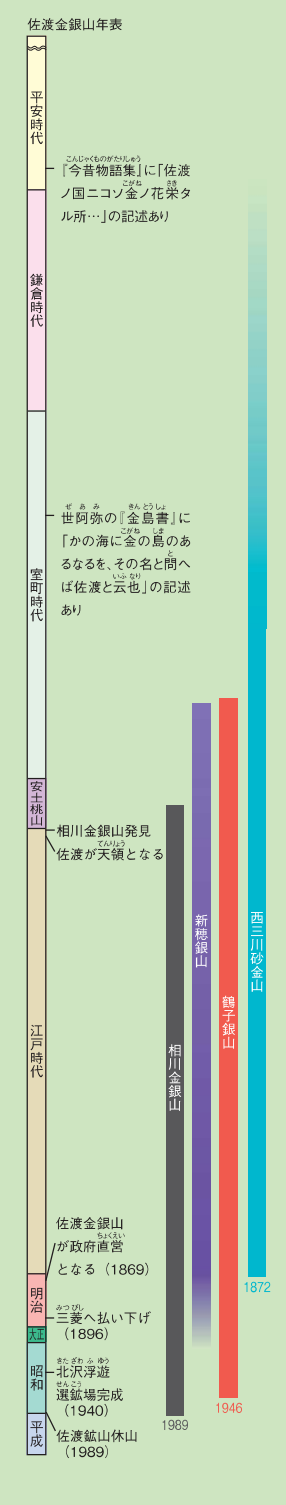


世界遺産登録のために、どんなことが大切か考えてみよう。佐渡の宝ものにはどんなものがあるか、調べてみよう。

笹川集落の文化的景観

相川の町に残る石垣　坂の多い相川では、鉱石をすりつぶすための石うすも石垣に再利用されました

付録1　佐渡金銀山年表



西暦	年号	金銀山関連事項
	平安時代末	『今昔物語集』に、佐渡で金がとれると記録される。
	室町時代	世阿弥が佐渡に流され、『金島書』を書く。
1542	天文　11	鶴子銀山が発見される。
1601	慶長　6	相川金銀山が本格的に開発される。
1603	慶長　8	大久保長安が佐渡代官になる。
1604	慶長　9	佐渡奉行所がつくられる。
1621	元和　7	佐渡で小判の製造が始まる。
1637	寛永　14	京都から水学宗甫が来島し、水上輪の作り方を伝える。
1696	元禄　9	延長約 1㎞の南沢疎水道が完成する。
1758	宝暦　8	佐渡奉行所に寄勝場が設置される。
1868	明治　元	イギリス人鉱山技師ガワーが来島し、火薬発破法を伝える。
1869	明治　2	佐渡金銀山が明治政府直営の鉱山になる。
1872	明治　5	西三川砂金山が閉山する。
1877	明治　10	日本初の西洋式坑道である大立竪坑が完成する。
1885	明治　18	佐渡鉱山に大島高任が鉱山局長として赴任する。
1889	明治　22	佐渡鉱山が皇室財産となり、御料局の管理になる。
1892	明治　25	相川大間港が完成する。
1896	明治　29	佐渡鉱山が三菱に払い下げられる。
1908	明治　41	相川北沢に出力 500kw の佐渡初の火力発電所が完成する。
1915	大正　4	戸地川第一発電所が建設される。
1940	昭和　15	相川北沢に東洋一の浮遊選鉱場が完成する。
1946	昭和　21	鶴子銀山が閉山する。
1953	昭和　28	佐渡鉱山の規模を縮小し、従業員を 530 人から 49 人にする。
1989	平成　元	佐渡鉱山が操業を休止する。

■編集に協力していただいた方々（敬称略）

庄山佳代子
松本真一郎
藤井　衛

■【写真・資料提供】（五十音順・敬称略）

●岩宿博物館　●金子勘三郎　●株式会社ゴールデン佐渡
●大安寺　●新潟県立歴史博物館　●長岡市教育委員会
●西山芳一　●本間俊夫　●盛岡市先人記念館　●山本修巳

世界遺産とは、地球上のうつくしい自然やすばらしい文化財を世界中の人の大切な宝ものとして守り、未来に残していこうとユネスコが定めたものです。

世界遺産には、文化遺産・自然遺産・複合遺産の３種類があります。

種類別の世界遺産登録件数は、2017 年 7 月現在、文化遺産 832、自然遺産 206、複合遺産 35（合計 1073）です。

国際協力を通じた保護のもと、国境をこえ、世界のすべての人々が共有し、次の世代に受け継いでいくべきものが世界遺産です。

世界遺産条約について調べてみよう

世界遺産の中の産業遺産

～新しい価値としての産業遺産～

ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）では、1994 年に、特定の分野の世界遺産が多すぎるとして、新たな価値観で世界の遺産を見直していこうということが提案されました。

日本では 2007 年に「石見銀山遺跡とその文化的景観」が産業遺産として評価され、世界遺産に登録されました。

石見銀山清水谷製錬所跡

エッセンのツォルフェアアイン炭鉱業遺産群（ドイツ）

ファールンの大銅山地域（スウェーデン）

世界遺産はどうやって決まるの？

文化財を調べ、大切なものであることを確認します。

↓

世界遺産暫定リストに記載するよう市町村と都道府県が文化庁に提案します。

＊世界遺産暫定リスト ⇒ 各国で作る世界遺産にふさわしいと思うもののリスト。

↓

暫定リストへの記載が決定。

提案された文化財が、国の世界遺産候補として認められます。

暫定リストに入らなければ世界遺産にはなれません。

↓

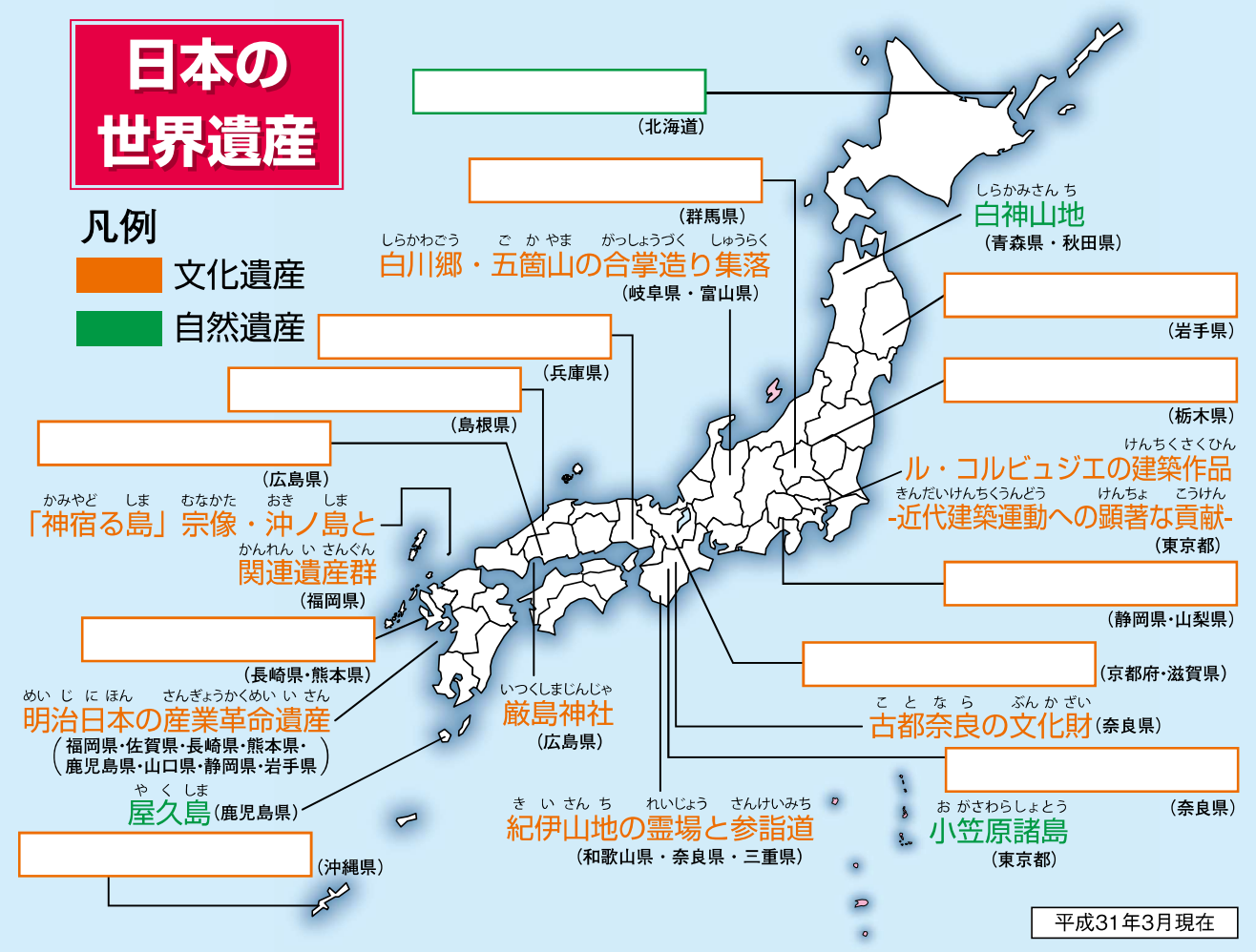
国からユネスコへ世界遺産の候補として推薦します。

↓

ユネスコが依頼した機関が、推薦された文化財の調査をします。

↓

世界遺産登録が決定し、候補地の文化財が、世界の宝ものとして認められます。



ここから選んで、上の地図に書いてみてね。

❶法隆寺地域の仏教建造物（奈良県）　❷姫路城（兵庫県）　❸古都京都の文化財（京都府・滋賀県）　❹原爆ドーム（広島県）　❺日光の社寺（栃木県）　❻琉球王国のグスク及び関連遺産群（沖縄県）　❼石見銀山遺跡とその文化的景観（島根県）　❽平泉ー仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群（岩手県）　❾富士山ー信仰の対象と芸術の源泉（静岡県・山梨県）　❿富岡製糸場と絹産業遺産群（群馬県）　⓫長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産（長崎県・熊本県）　⓬知床（北海道）

	世界遺産暫定リスト	所在地	種類	掲載年
1	「武家の古都・鎌倉」	神奈川県	文化遺産	平成 4年
2	「彦根城」	滋賀県	文化遺産	平成 4年
3	「飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群」	奈良県	文化遺産	平成19年
4	「北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群」	北海道・青森県・岩手県・秋田県	文化遺産	平成21年
5	**「金を中心とする佐渡鉱山の遺産群」**	新潟県・佐渡市	文化遺産	平成22年
6	「百舌鳥・古市古墳群」	大阪府・堺市・羽曳野市・藤井寺市	文化遺産	平成22年
7	「平泉ー仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群ー（拡張登録申請）」	岩手県	文化遺産	平成24年

新潟県・佐渡市

新潟県教育庁文化行政課世界遺産登録推進室
TEL：025-280-5726
E-mail：ngt500080@pref.niigata.lg.jp

佐渡市世界遺産推進課
TEL：0259-63-5136
E-mail：k-goldmine@city.sado.niigata.jp

平成31年3月発行